論 文 内 容 要 旨

氏名（しめい）	たむら　たかみつ 田村　貴光
学位論文題名	OUTCOME OF CLIVAL CHORDOMAS AFTER SKULL BASE SURGERIES WITH MEAN FOLLOW-UP OF 10 YEARS （斜台部脊索腫における頭蓋底手術後　平均観察期間 10 年の予後評価）

背景と目的：頭蓋底脊索腫は増殖速度が遅いため病理学的には良性に分類されますが、頭蓋底の奥深い部位での骨浸潤を伴う腫瘍であるため、全摘出術が難しく、高い再発率を示し、drop metastasis（髄液を介した播種硬膜内髄外転移）を起こす場合があることから、臨床的には悪性度の高い腫瘍です。全摘を目指した積極的摘出術と術後放射線照射が推奨されておりますが、長期予後はいまだ充分ではありません。そこで、様々な頭蓋底アプローチ法を用いて全摘出術をめざし、術後早期に残存病変または再発病変に対して放射線治療を行った我々の治療症例について、長期予後成績と予後不良因子を明らかにすることを目的とした研究を行いました。

方法：1992 年から 2011 年までの頭蓋底脊索腫 24 症例において、積極的全摘出術を主要戦略とした治療を行いました。腫瘍浸潤した周囲骨病変を可能なかぎり全摘できるように、腫瘍進展方向にあわせて、頭蓋底アプローチ法を選択しました。摘出術後はすべての症例において MRI 検査による密度の濃い経過観察を行い、小さく、局所的な再発病変を認めしだいすぐにガンマナイフ治療、または摘出術を行いました。摘出術後からの平均観察期間は 10.2 年（範囲 1-17.2 年）でした。

結果：5 年、10 年、15 年の全生存率はそれぞれ、86%、72%、72%でした。5 年、10 年の無増悪生存率はそれぞれ、47%、35%でした。腫瘍の脳幹進展と部分摘出術が生存率についての不良因子項目でした。

結論：我々の研究結果は、積極的な全摘出術をすることで頭蓋底脊索腫の長期予後が改善することを示唆しています。頭蓋底脊索腫は、様々な頭蓋底アプローチ法を駆使して全摘を目指して摘出されるべきであるということを強調します。